
桜舞恋歌

橘伊津姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜舞恋歌

【Zコード】

N4605V

【作者名】

橘伊津姫

【あらすじ】

春

満開の桜が舞う吉野山。
そこで出合った二人は
共に哀しみを背負つた者
同士だった。

必ず 貴女を
迎えに参ります。

自サイト「皓月迷宮」にて公開しております。

男は“鬼”として生まれてくるのだといつ。女は生きながらにして“鬼”に成るのだといつ。

「いやああ！　この子を、この子をどこのかへ！　このよのうな恥まわしい子など、妾の産んだ子ではない！」

それが、生まれたばかりの彼に投げつけられた、初めての言葉だつた。

「いかに美しかろうとも、笑わぬ泣かぬ姫では面白くも可笑しくも無い。白拍子の方が、まだ可愛げがあつとさういふものじや」

それが彼女に向けられた、世の評判の全てだつた。

満開の桜が舞い散る吉野の山を、私は一人歩いていた。この山の桜は、圧倒的な存在感で人間に迫つてくる。私が桜を見ているのではない。桜が私を見ているのだ。

踏み固められた道を歩いて行く。特に行き先が定まっていた訳ではない。言つなら、桜に誘われ、桜に導かれて、といった所か。山から吹き降ろしてくる風に桜の花びらが舞う。その風に、微かに琵琶の音色が混じる。

嫋々《じょうじょう》と。そしてまた嫋々と。

そのまま琵琶に誘われて歩みを進める。

一人の老婆が琵琶を抱え、桜の根元に座している。何処を見ているのか判らぬ瞳に映るのは、現世の桜か、幽世の華か？

「旅のお方かえ？ここから先は鬼が出る。お止めなされ」

琵琶を弾く手を止め、老婆が私の方へ顔を向けた。その目には、果たして私が映っているのか。

「旅という程の事もない。ただ桜に誘われ、桜に魅入られての一人歩き」

歩みを止めた私の目には、老婆がわずかに笑んだような気がした。穏やかな表情は気品に満ちている。琵琶の腕前から考えても、それなりの家柄の出なのだろう。

「急ぎの道行きでないのであれば、しばし、この婆の昔語りに付きおつては下さらんか？ここで待ち合わせる約定。なれど、少しづかり早かつたようじゃ」

私も先を急いでいる身ではない。それに、この不思議な老婆に興味を惹かれていた。

「私でよければ、お付き合いいたしましょう」

桜の花びらの敷き詰められた吉野の山中。異界に迷い込んだが、
妖あやしの術にでもはまつたか。それでも良いか。そう私は思ったのだ。
「旅のお方。お主様はご存知でございましょうか?」この吉野の山には
は“鬼”が出るといふ。そう、今から五十年ほども昔の事でござ
います……」

吉野の山には鬼が住む。

確かにこの山には、鬼の一族がございました。頭目の名は「百鬼丸」といい、五十人ほどの手下を連れて、人里はなれた山奥でひつそりと暮らしておりました。もともとは京の都を荒らしまわった鬼の一族・刃雷丸に与しておりましたが、生来、血を好みぬ性質であつた百鬼丸は一族を抜け、この吉野の山に入ったのです。それ以来、鬼たる証を隠し、人目を避けて暮らしておるのでございます。

その一族の中に、ひときわ美しい若鬼がございました。

その名を、來桜丸と申しました。鴉の濡れ羽色の黒髪。すらりと伸びた手足。凛々しい顔立ちの若者を、鬼たらしめているのは、額から突き出た一本の角。しかし真珠色に輝く角は、若者の美しさを損なうものではなく、かえって、來桜丸の容姿を引き立てるのでございます。

「鬼子」として生まれてすぐに実の親から捨てられた來桜丸は、吉野の百鬼丸に拾われ、一族の中で育つたのです。年若い來桜丸は、自分を捨てた親を恨むでもなく、まつすぐな心根の優しい若者でございました。

いつも鬼の里から程近い、山深くの滝へ出かけては山の動物達と戯れるような若者だつたのでございます。

季節は春。満開の桜は舞い散り、風は心地よく肌を包む春。

下弦の月が白々と桜を照らし、來桜丸の眼を楽しませておりました。月明かりに誘われて、百鬼丸の館を抜け出した來桜丸は山中を散策しながら、滝壺の方へ向つて歩を進めていったのです。やがて、柔らかな風に乗り、來桜丸の耳に琵琶の音が聞こえてまいりました。

嫋々《じょうじょう》……嫋々。

「このよろくな夜更けに滝から琵琶の音が聞こえるなど、妖しが旅人を惑わそうとしているのか……。好奇心が揺らいだ來桜丸は、琵琶の音につられて滝へと向つてまいりました。

白い月明かりを浴びて、滝壺へ向つて琵琶を弾いている女人の後姿が目に入り、來桜丸は足を止めて、しばしその琵琶に音に聞きほれておりました。染み入るような琵琶の音は、高く低く、悲しく切なく歌つてあります。

來桜丸がもつと近くへ寄りうつとした瞬間、女人の指じゆが止まり、琵琶の音が絶え、辺りは静寂に包まれたのでございます。

「何者じや？」

微かに後ろを振り返り、誰すいか何の声を上げたその顔の美しさ。くつきりとした鼻梁に月が淡い陰を落とし、夜目にも紅いその唇は意思の強さを感じさせて一文字に引き結ばれおりました。

「これは、失礼。あまりにも美しい琵琶の音が聞こえてきたもので、つい……」

女人は表情一つ動かさずに來桜丸へ向き直り、しげしげとその顔を見つめながら口を開き、こう申したのです。

「かような刻限に一人で夜歩きとな。そなた、妖しの類たぐいかえ？ わたくしを喰らうても、美味くはなかろうよ」

「い、いや。わたしは來桜丸。この吉野の山奥に住む者で、妖しではありません」

「そなたのか？ 別に妖しでも構わぬ。どうせ、わたくしが死んでも、誰も悲しみはせぬ」

命芽吹く春の夜に、なんとも物騒な事を口にする女人でございました。來桜丸は少々驚きながらも、女人に名前を尋ねてみたのです。

「わたくしの名など知つてどうするのじや？」

山から吹いてくる風に軽く結い上げた髪がふわりと舞い、來桜丸の鼻先を掠めました。ほのかに伽羅きやらの香が鼻腔をくすぐり、來桜丸は一族以外の者と初めて口をきいた事を意識し始めたのでござります。

「では、何とお呼びすればよいのです？」

「……砂姫、と。皆はそう呼ぶ……」

これが、来桜丸と砂姫の出会いでございました。

「**壹鷹**^{いちたか}の兄者、砂姫を知つておられるか？」

昨晩に出会つた砂姫と名乗つた不思議な女人の事を、薪割りをしていた年嵩の鬼に尋ねてみる事にしたのでござります。こんな気持ちは初めてでございました。気になつて気になつて仕方がないのでございます。

「砂姫？ああ、都の一条の**大臣**^{おほひしん}の姫の事ぢやろつ。都でも評判の美しい姫じやと聞くが、難ありじやぞ」

「難……とは？」

壹鷹は斧を振り上げる手を休めると、切り株に腰掛けて來桜丸を見上げました。

「一条の大**臣**の姫は、真の名を用姫と申される。生まれた時に、月の様に麗しい顔の赤子じやというて付けた名前らしいのじやが、これが長じても一向に笑わぬ娘でな。**訝**^{いぶか}しく思った大臣が、高名な陰陽師を頼んで見てもらつたところ、『月にも勝る』と付けた名前に月神が怒り、姫から心を奪つていつたと申したのじや。それ以来、姫は笑いもせぬし、泣きもせぬと言うぞ」

額に流れる汗を拭つて、壹鷹は不思議そうに來桜丸を見つめて申しました。

「何ゆえに、砂姫の事など聞くのじや？」

來桜丸は逡巡^{しゅんじゅん}の末、昨夜、館を抜け出し滝壺で出会つた女人が砂姫と名乗つた経緯を壹鷹に話したのでござります。

話を聞き終わつた壹鷹は腕を組んで考え込んでおりましたが、やがてぽつりと、噂はまことであったか。と呴きました。

「兄者、噂とは何なのです？」

「ん？ああ。砂姫を生んで間もなく、母御は産後の肥立ちが悪くて亡くなつたのだと聞く。今の母御は大臣の後添いで、砂姫には義理の母御となる。この母御と大臣との間には、もう一人姫があるのじ

や。母御殿は自分の生んだ姫を何としても入内させたいらしいのじ
やが、当の帝が砂姫の噂を聞きつけ興味を持ったというのじや。笑
わぬ姫なら、自分が笑わせて見しようと……」

それを聞いた來桜丸は、自分の胸の中に硬い、尖ったモノが刺さ
つたような気がしたのでございます。しかし、まだその時は、それ
が一体どのような意味を持つているのか、來桜丸自身にも判りはせ
なんだのでござります。

「それを知った母御殿が、病平癒を祈願すると謀つて、砂姫を吉野
の別宅へ移させていると聞いたが……どうやら、本当らしいの」
滝壺に向かい、ただひたすらに琵琶を奏でていた姫。自分が死ん
でも、誰も悲しむ者はいないと、何事もないかのように口にする姫。
笑わない、泣かない姫。だからといって、心がない事になってしま
うのだろうか？

來桜丸が自分の考えに沈みこんでしまおうとした時、自分を呼んで
いる声が耳に入ってきたのでござります。

「來桜丸！ どこにあるのじや？」

声の主は如月あさひといふ名の年若い娘。麓の村に住む娘で、年の頃な
ら十五・六。大きな目が印象的な元気の良い娘でござります。結い
もせずに流した髪を揺らしながら、館の裏庭へ駆け込んで参りました。

「おお、これはこれは。わしが來桜丸を一人占めしていると知れた
ら、如月に何を言われるか知れたものではない。早く行つてやれ」
「冗談めかして壱鷹に促されると、來桜丸は軽く一礼してその場を
離れたのです。

「如月、何か？ わたしはここじや」

山と積まれた薪の陰から顔を出した來桜丸の姿を認めるに、如月
はパッと顔を輝かせ、彼の鬼に走りよりました。

ドンッと身体全体で來桜丸にぶつかって、ようやく足を止めました。

「ああ、來桜丸。村の庄屋さまが、今回預かつた反物は思いの他高

値で売れたので、この次からは反物の数を増やしてもらつても構わない」と。それから、これが今回の代金

息を切らしながらそう言つと、懐の奥から大事そうに財布を取り出しました。

「この次に荷を卸しに行く時で良かつたのに。わざわざ、それを届けに来ておくれなのかい？ この山道、大変だつただろうに」

来桜丸の言葉に、如月は顔を紅くして答えました。

「来桜丸は優しいの。良いのじや。如月が届けると、庄屋さまにお願いして出て来たのじやから。それに、来桜丸にも会いたかつたし……」

最後の方は声が小さくなつて、来桜丸の耳には届きませなんだ。

鬼の一族が住む隠れ里では、女衆が織る反物を麓の村に卸し、それを町で売つてもらつて糊口ひじりを凌いでおりました。如月と来桜丸はそのときに知り合つたのでござりますが、娘は美しい鬼の若者に、一目で恋をしてしまつたのでござります。それ以来、何かと用事を見つけては、麓の村から隠れ里へと通うようになつていていたのです。しかし、来桜丸は「好かれる」「人に愛される」という事が良く分かりませぬ。養い親の百鬼丸は愛情をもつて育ててくれましたし、里の者達も良くしてくれてはいます。ですが、それはいわば「同族愛」であり、如月のように恋しい気持ちとは違うのであります。「では、お館さまにお伝えしよう。ついておいで」

如月は、自分の気持ちが来桜丸に伝わっていない事を知つております。ため息を一つつくと、来桜丸の後について百鬼丸の館へ足を向けたのです。でも、如月は思つておりました。いつかは自分の気持ちに来桜丸が気付いてくれると。そして、二人で暮らすのだと、夢描いていたのでござります。

百鬼丸は如月の伝えた庄屋の言葉に大層喜んで、次の荷を卸すときは、反物の数を増やす事を承諾してくれました。そばで聞いていた女衆の者達も嬉しそうにしております。正体を明かして人前に出れば、「鬼」と恐れられ蔑まれる事を承知している彼らです。自分

の作った物を評価してもらい、褒めてもうらえる事はこの上ない喜びでございました。

「下の村まで送つていい。」

来桜丸の言葉を聞いて、如月はパッと顔を輝かせました。それをみて来桜丸は、こんなに喜ぶのであれば、今度砂姫に出会ったときには館まで送つて行くことにしようと考えていましたのでござります。

桜の咲き乱れる山道を歩きながら、来桜丸と如月はとりとめもない話を続けておりました。ハラハラと舞い落ちる花びらが、二人を掠め、辺りを薄紅色の景色に変えておりました。

「吉野の山の桜は、都の桜に比べると強い感じがするな」
桜を見上げた來桜丸の横顔は、まるで一服の錦絵のように美しく、
如月はつかの間うつとりとそれを見つめておりました。

「如月？」

不思議そうにかけられた來桜丸の声に、はっと我に返った如月は
火照った顔を隠すかのようにプレイッと横を向き、少しづつきらぼう
に答えました。

「まるで、都の桜を知つておるような『ぶつじやな。どうせ、都の
桜など見たこともないのである』って？」

「いや。幼い頃に、見たことがあるのじや。と言つても、ほんの僅わず
かの間しか都にはおらなんだのでな。あまり良くなは覚えておらぬ。
しかし、都の桜はもつとしなやかな感じがしたように思ひ。ここ
の桜達はどうしりとしておるな。まるで、何もかもを見守り、包み込
むかのようじや」

「來桜丸、都に住んでおつたのか？」

如月は來桜丸の事をあまり知らない事に気が付いたので『ございま
す。來桜丸だけではございません』。山深くの里に住んでいる者達が、
いつからそこに住みついたのか、一体どのような者達なのか、それ
すらも知らない事に初めて思い至つたので『ございます』。

「來桜丸は、あまり自分の事を話してはくれぬのじやな」

「話すような事を持ち合わせておらんのじや」

「如月は、來桜丸の事なら、何でも知りたいと思つておるのに……」

「そのように、私の事を知つて何とする？」

來桜丸にとつて、自分の全てを知られると言う事は、すなわち『

鬼』である事を知られる事に他なりませぬ。その警戒心が声に表れ
たのでしよう。如月は慌てて手を振りました。

「いいのじや。今のは、忘れておくれ」

そうして、ここからは一人で帰れると、來桜丸の声を振り切つて走り出したのでござります。残された來桜丸は、どうして如月が自分の事を知りたがるのか、なぜ突然走り出してしまったのか判らうはずもございません。鬼の身である自分が、人に好かれるなどと考えた事もないからでござります。

首をかしげながらもと来た道を引き返し始めると、木々の間から、物々しい行列が山中に入つてくるのが見えました。咄嗟に身を隠し行列の行方を見つめていると、それらの行列は來桜丸のいる道を逸れ、見えなくなつていきました。

身を隠しながら、來桜丸は考えました。あの行列はなんなのか？もしや、吉野の山中に隠れ住む鬼の一族を討ち果たしに来たとしたら……。恐ろしい考えに至り、來桜丸は木々の陰に身を隠しながら、行列が消えていつた道の方へと歩を進めました。

一族が住まう隠れ里とは違い、道は良くなられ、徐々に開けた場所へと向つていきます。やがて、高い柵で囲まれた貴族の屋敷が見えてまいりました。行列はその館へと入つていったのでござります。行列の中には、どうやら輿のような物も見て取れました。物陰に潜み様子を伺つていると、輿の中から煌びやかな衣装を纏つた僧侶が降り立つたのでござります。僧侶は侍者と共に館の中へ入つてゆきました。

隠れていた物陰から出でくると、來桜丸は屋敷へ向つてゆっくりと歩いてまいりました。このような場所に屋敷を構えるとは、いつたいどのような貴族なのでしょう。つい、好奇心が勝つてしまつたのです。ほんの一瞬、辺りに対する警戒心が緩みました。

「何者ぞ！」

屋敷の柵の中を覗き込もうとしていた來桜丸は、背後からかけられた誰何の声に驚いて振り向きました。そして、油断した口を悔やみました。

「わたしは……。わたしはこの吉野の山中に住まう者でござります。

山道を歩いておりましたら、こちらの行列が見えたものですから、つい何方がお越しになられたのか気になりました。『ご無礼致しました。申し訳ございません』

來桜丸が頭を下げる、声をかけた人物が近寄ってきたので『ござります。どうやら屋敷の警護をしている検非違使のようでございました。來桜丸は内心、舌打ちをしておりました。検非違使は手にしていた長弓を來桜丸の頬にあて、下げた頭を無理やりに上げさせました。まじまじと彼の顔を覗き込み、その美しい顔に見入りました。『怪しげな奴よ。ここを都の重鎮、一条の大臣の別宅と知つておったのではないか? 盗みに入る算段でもしておつたのであるう』「困り果てた來桜丸が、どのようにして逃げ出そうか考えていたその時、思わず所から救いの手が差し伸べられました。

「その手を離しや」

屋敷の回廊に、砂姫の姿があつたのでござります。來桜丸に手をかけていた検非違使はその言葉に、ですが、と口を開きかけました。「その者は、わたくしの知り合いの者です。そなたが怪しむほどの者ではありません。わたくしが出かける為に、呼び寄せたのです。これ以上わたくしの客人に無礼を働くと、いかに警護の者とはいえ承知しません」

表情の動かぬ顔で静かに淡々と語る砂姫は、その無表情ゆえに、かえつて気品高く映りました。検非違使は納得いかない顔付きでございましたが、他ならぬ屋敷の主にそう言われてしまつてはどうしようもございません。『ご無禮致しましたと堅苦しく礼をして、一步脇に下がりました。姫は階を降り、來桜丸を手招きいたしました。

「出かけます。わたくしに付き合いなさい」

來桜丸が黙つて頭を下げていると、回廊の端から初老の女房殿がやつてまいりました。階に立つ砂姫の姿を認めたと、目を丸くしながら近寄つてまいります。

「姫様、何処へ参られます? 間もなく了慧様のご祈祷が始まります。姫様の御病氣平癒の祈祷でござりますのに、何処へお出まし

になられるのでござりますか？」

祈祷？　來桜丸は、壱鷹に聞いた話を思い出しました。砂姫は、

病療養を名目にこの吉野に連れてこられたのだと。

「泰葉^{やすは}、心配はござりぬ。少し歩いてくるだけじゃ。わたくしが居なくとも祈祷は出来よう。どうせ父上が寄越した体面だけの祈祷。今さら祈つたとて、わたくしが変わる訳でもあるまい？」

泰葉と呼ばれたこの女人は、話から察するに砂姫の乳母のよつて見受けられました。

「しかし、その者は……？」

「案^{あわ}するでない。吉野の山の者じや。この者がおれば、おさおやうの中で迷う事もあるまい」

そして來桜丸に視線を移すと、

「支度をして参る。そなた、そこでしばしお待ち

と、声をかけ回廊を行つてしまわれました。後に残されたのは、どうして良いのか判らぬ來桜丸と、心配そうに姫の後姿を見送る泰葉の一人。

「……そなた、名は？」

躊躇^{ためら}いがちにかけたれた声に、來桜丸は静かに答えました。

「吉野の山中に住まう者で、來桜丸と申します」

「さようか……。姫様とはいかよくな？」

泰葉にとつては、それこそが一番の心配事なのでしょう。得体の知れない若者を、いきなり客だと言われても戸惑うばかりでござります。さて、何と答えたものでしよう。素直に『以前、夜の滝で……』と正直に答える事は出来なかつたのでござります。常識で考えると、身分ある貴族の姫君が、夜更けに一人で山中の滝に居たなどという事が有ろうはずもありません。しかし、そう答えたばかりに、姫がこの先屋敷から出られぬような事になつては困ります。どう考へても、夜更けに屋敷を抜け出したとしか考えられないのですから。

「以前、道に迷われ難儀^{なんぎ}しておられた時に知りおうたのでございま

す。その時は、一条の大臣の姫君とは知らず、大変なご無礼を……

苦し紛れの言い逃れでしたが、泰葉は信じたようではありました。たびたび屋敷を抜け出していた、一人でどこかへ出かけているのを知つておられたのでしょうか。

「來桜丸殿。どうぞ、姫様をお願いいたします。都の口さがない者達は、姫様の事を悪し様に申しておりますが、本当に心根の優しい方なのです。生まれてすぐに母君を亡くされ、義理の母君様には抱かれた事もないでござります。優しき言葉の一つも掛けられた事のない姫様が、笑えぬようになるのは当たり前のことでござりますよう」

袖口で目元を押さえながら、泰葉は來桜丸に訴えたのでござります。

「いや、女房殿。そのような事を、わたしのよつた得体の知れない者に語つてしまつて、良いのでござりますか？」

慌てた來桜丸がそう申しますと、泰葉は目元拭い、よつやく顔を上げました。

「良いのでござりますよ。來桜丸殿は、姫様がお呼びになられた方。それだけ、姫様が心をお許しになられたのでございましょう。本来ならば身分がどうのと、つるさい事を申し上げるべきなのでしょうが、貴方様とおられた姫様は、なにやら楽しげな様子であらしやりましたのでな。わたくしは、姫様が幸せであられればそれで良いのでござります」

そしてもう一度、姫様を頼みます。と深々と頭を下げたのでした。

「待たせたな。では参ろうか」

振り返ると、緑の黒髪を頭上高く結い上げ、ひとえ きりばかま 単に切袴姿の砂姫が立つておられました。

小者が馬を牽いてくると、來桜丸に向つて

「そなた、馬には乗れるのか？」

と尋ねられました。

「たしなむ程度には……」

「良い。吉野の山中を案内いたせ」

泰葉またがにいつてらつしゃいませ、と送り出され、來桜丸は砂姫の後ろに跨ると手綱を取りました。桜舞い散る吉野の山を、二人を乗せた馬がゆっくりと進んでいます。來桜丸は、自分の両腕の間にいる砂姫の髪や召し物に焚き染められた伽羅の香りに、胸が高鳴るのを止められませんでした。馬が揺れるたびに、姫の身体が來桜丸の身体に触れるのです。まるで心の臓が口から飛び出してしまつ程にドクドクと脈打つのです。

生まれてから、このように間近で女性と接した事のない來桜丸にとって、戸惑うばかりの出来事でございました。

屋敷から遠ざかり、人目に付かない所まで馬を進ませた來桜丸は、思い切って口を開く事にしたのです。

「月姫様」と申されたのですね。先日は大変失礼致しました。一此度はお助け頂き、感謝の言葉もございませぬ

「月……姫か。その名で呼ばれたのは、久方ぶりじや。皆はわたくしを笑わぬ姫、砂のように味気ない姫よと嘲あざけつて、砂姫と呼ばれる。わたくしの本当の名前を呼ぶ者は、泰葉たけやとそなたの「一人だけじや」「げせん」不快だつたでしょうか? わたしのような下賤げせんの者が、姫様のお名を口にするのは失礼かと思つたのですが……。どうしても『砂姫様』とはお呼びしたくなかったのです」

「何故じや?」

感情のこもらぬ声で尋ねられて、來桜丸は言葉に詰まりました。

「それは……。わたしにも判りかねます。どうしてなのでしょう?」「おかしな奴じやのう。聞いてるのは、わたくしじや。なぜと問われても、答えられるはずもなかろう」

「お嫌でしたら、もう一度とお名前ではお呼び致しません」

恐る恐る聞いた來桜丸の耳に飛び込んできたのは、思いも寄らぬ言葉でございました。

「構わぬ。そなたに『月姫』と呼ばわれるのは心地よい。泰葉だけ

に許しておつたのじゃが、そなたもわたくしを『月姫』と呼ぶが良い

砂姫　　いえ、月姫と來桜丸の間に、確かに何かが生まれつつありました。この日から、來桜丸は月姫の散策に従うようになったのです。一人でぞぞ歩く姿が、吉野の山で見かけられるようになりました。

「來桜丸！　來桜丸はどこじゅ？」

一族の隠れ里に、如月の声が響き渡りました。ちょうど百鬼丸の屋敷から出ようとしていたところであつた來桜丸は、如月の声に顔を出しました。

「どうした、如月。そのように大きな声で」

來桜丸の姿を認めた如月は、口を尖らせて彼に詰め寄りました。「このところ、いつも來桜丸は留守じゅ。一体、どこへ行つているのじゅ？」

「どこつて……一條様のお屋敷に参つておる。それがどうした？」

そう問われて、如月は顔を伏せました。せつかく來桜丸に会いに来ても、いつも出かけた後で会えないのです。どこで誰とどうしているのか。いらぬ心配ばかりが心をかすめます。

「それで今日は何用なのじゅ？　私はこれから出かけるので、急いでおるのだが」

「今日も、一条の姫様と会うのか？」

面伏せたまま如月は問いかけました。

「ああ」

里の入り口へ向つて歩き出している來桜丸を追いかけながら、如月は唇を噛み締めました。

「あの姫様は、來桜丸には似合わぬ」

いきなりの言葉に、來桜丸は歩みを止めました。振り返つた彼の視線を痛いほど感じながら、如月は言葉を止める事が出来なかつたのでござります。

「第一、身分が釣り合わぬではないか。相手は貴族の姫君なのであります？　來桜丸の事だつて、都合の良い使い走りとしか考えておらぬのではないか？」

「如月」

「笑わぬ姫様だと……。心のない姫様だと聞いたぞ。そんな姫君のどこが良いのじゃ！ 笑えぬ女なぞ、女として疵物きずものではないか！」

「如月つ！」

パン！

乾いた音が響きました。手を上げてしまつた來桜丸も、頬に手をやる如月も、お互よつがいが自分の身に起こつた事に戸惑つておりました。

「す、済まぬ……。大丈夫か、如月」

來桜丸の問いに、如月は唇を噛み締めて答えようとはしませぬ。「じゃが、あれば言いすぎじや。月姫様は心のないお方ではない。それどころか、誰よりも優しく清らかな心をお持ちなのじゃ。だから、如月。あのよつに悪し様に言うてくれるな」

「來桜丸は……月姫様の事が好きなのじゃな……」

思いの寄らぬ言葉でした。來桜丸は息を飲み込むと、静かに如月に答えたのでござります。

「……そうだな。私はきっと、月姫様の事を好いてあるのだと思う。身分違いと言う事は先刻承知の上じや。しかし、私は月姫様の側に、たとえ報われなくとも共にいたいと思うよ」

認めてしまつてから、來桜丸は改めて自分の気持ちに気が付いたのです。

「來桜丸は……馬鹿ばくじゃ！」

如月は涙声で叫ぶと、山道を駆け下りて行きました。その後姿を見送りながら、來桜丸はやつと如月の気持ちに気付いたのでござります。自分が人を好きになつてみて初めて、如月が自分に寄せていてくれた好意を理解したのでござります。しかしそれでも、來桜丸の心は月姫の下へ向います。

山を下り、一条の大辻の屋敷へ向うと、そこにはすでに出かける用意を終えた月姫が來桜丸を待つておりました。

「遅かつたな。何かあつたのかえ？」

月姫の言葉に、來桜丸は微笑み首を振つて答えました。

「何もありませぬ。さあ、出かけましょうか」

一人は馬に跨ると、吉野の山を流れる川へ向つて進んでいました。

「の、來桜丸。誰かを好くといつのは、いかよな氣持ちなのじやね？」

「どうされたのですか、いきなり」

月姫はやうつむき加減に馬に揺られながら口を開きました。

「屋敷の端女^{はしめ}が、麓の村の男と一緒になるので暇^{いとま}をほしいと言い出したのじや。それは構わぬ。しかし、わたくしには『誰かを好く』という気持ちがよう判らぬ。どのような気持ちなのじや？」

少し前の來桜丸なら、月姫の間に答えることは出来なかつたでしょう。でも今は違います。自信を持つて答えることが出来るのでござります。

「誰かを好きになる気持ちと申しますのは、共にあつて、こゝ、胸の奥が温かくなつたり、苦しくなつたりいたします」

「何故じや？ 温かくなるのど、苦しくなるのは違つであります。」
「愛しい方にお会いできれば、胸の奥が温かになります。でも、その方にお会いできなかつたら、悲しそうなお顔をされていれば、胸の奥が苦しくなるのでござります。一緒にいるだけで、楽しく感じたり嬉しくなつたりもいたします。一人その方の事を思い出して、切なく思つたりもするのでござります」

「詳しいな。來桜丸は、誰か好いておる女子があるのか？」

「いざりますよ。とても愛しく感じているお方が」

月姫からは顔が見えないのをいい事に、來桜丸は姫の後姿を見つめながら優しく微笑みました。

「どうしたのだろう？ 今、お主が誰かを好いておると聞いたとき、胸の奥の方がチクリとしたぞ。何やら、怪しい病であるうか？」

その言葉に來桜丸は目を見開きました。それは。

「……姫様、それは病ではありません。どうぞ安心なされませ」

内心の動搖を悟られぬよつて、出来るだけ冷静に。それでも、鼓動が高鳴るのを止める事はできません。背後から月姫を抱きしめた

い衝動を、どうにかして押し止めた來桜丸は、平静を装つて馬を止めました。

「ちらかな陽光に煌く川は、柔らかな若草の生い茂つた岸辺を優しく洗っています。來桜丸は馬に積んできていた毛氈を広げると、月姫が座つて休めるように設えました。月姫は流れる川面に映つた自分の姿眺めておりましたが、やがてその顔に指を当て、やにわに抓りだしたのです。

「何をなさつておいでなのです！」

驚いた來桜丸が月姫の手を取ると、姫は無表情で彼を見上げてこうおっしゃいました。

「この顔も、抓つてみれば何か変わるかと思うてな。笑わぬ顔にも、少しは笑みが浮かぶやも知れぬと思つたのじや」

「 つ！」

「都の殿方は、わたくしを見てこう言つ。『笑わぬ姫など、白拍子にも劣る。ただの人形じや』と。父上もおっしゃつた。『いくら琵琶が上手くても、心の無い姫に心地よい樂の音が紡げる訳も無い』と。義母上もおっしゃつた。『笑わぬ女は、女として疵物なのじや』と。可愛げのない娘よ、薄気味の悪い姫よと言られて、わたくしは育つてきた。ならば、心の無い、笑えぬわたくしは『人』ではないのか？ そうなのかも知れぬ。わたくしはもしかしたら、『鬼』なのがかも知れぬぞ」

気が付けば、來桜丸は震える腕で月姫を抱き締めておりました。心が無ければ、こんなにも傷つく事はないのです。恐らく、これまでも何度も自分で自分の顔を抓つておられたのでしょうか。僅かでも表情をえることが出来るやも知れぬと。周囲の口さがない中傷に耐えて、一人で自分を守つてこられたのでしよう。

「姫……姫は『鬼』などではありませぬよ。『鬼』とは自分の心中忠実なものです。腹が減れば喰い、眠たくなつたら眠る。悲しいときは大声で泣き、楽しいときは腹の底から笑う。姫が笑えぬとおっしゃるのなら、それはとりもなおさず、姫が『人間』である事の

証明となりましたよう」

「そうか……。わたくしは、笑えぬが故に『人』なのじゃな。ならばいっそ、わたしくしは『鬼』になってしまいたい。たとえ忌み嫌われようと、恐れらりょうとも、自分の心に嘘偽り無く暮らせるのであれば、その方がどれだけ幸せである事か……」

「そんな事をおつしやらないで下さい。おつしやつては駄目です。姫はどうぞ、そのまま。どうぞそのまま『人』であつてくださいませ」

來桜丸が呟いたその瞬間。

ひゅつ！

鋭く空気を切り裂く音が來桜丸の耳朶を打ちました。咄嗟に月姫を背後にかばい、音のした方へ向き直ると、放たれた矢が來桜丸の目の前に突き立つのが同時の事でありました。

「何奴じや！」

彼が一声吼えると、茂みの奥で何かが動く気配がござります。

「姫はそこにおいでください！」

そう叫ぶと、來桜丸は茂みの中へ飛び込んで行きました。果たしてそこには、長弓に矢をつがえた男達が。

「おのれ！ 貴様、化け物か！」

一人の男がそう叫び、來桜丸に向つて矢を放ちました。向つくる矢を空中で掴み取ると、來桜丸は一つに折つて投げ捨てました。

「お主達、何者じや！ あのお方を一条の大忠の姫君と知つての狼藉か！」

よく響く声で一喝されると、男達は及び腰になりながらも長弓を放り出し、太刀を構えたのでござります。

「何ゆえ、月姫様に危害を加えようとする！？ 貴様ら何者じや！？」

一番前にいた男が、背後に居る三人の者に言いました。

「この者は、私が引き受けた。お前達は、砂姫を亡き者にするのだ」

それを聞いた途端、來桜丸は全身の血が逆流するほどの怒りを感じました。

「我らは多勢、それにひきかえ貴様は一人。しかも、足手まといとなる砂姫を守つて闘うと言うのか？見れば、獲物を持ち合わせている様子も無い。我らの狙いはただ砂姫一人。丸腰の者まで斬ろうとは思わぬ。命が惜しくば早々に立ち去り、ここで見聞きした事は他言せぬ事だ」

どうやらその男が頭目のようにございました。男の言葉が終わらぬうちに、背後で月姫の様子を伺っていた者達が茂みから飛び出そうとしたのです。

しかし……。

血煙を振り撒いて仰け反つたのは、抜刀していた男の一人だったのです。目にも留まらぬ速さで動いた來桜丸の揃えた五指の爪が、狙い違わず相手の喉笛を貫いておりました。

「姫を 砂姫と呼ぶでない……。姫の苦しみも悲しみも知らぬ輩が、偉そうにわたしに何を言う。貴様らのような卑しき刃に、姫の血を吸わせはしない。わたしを丸腰と侮つたな？吉野の山の妖しを敵にまわして、生きて帰れると思つなよ……」

振り返つた來桜丸の額には、異形の印、真珠色に輝く一本の角が現れおりました。

「お……鬼じや……。あの姫には、鬼が憑いておるのじや！」

「ええい、何を躊躇ちうちょしてある！ 砂姫は後回しだ！ この鬼を倒せ！」

静かなはずの山中に、阿鼻叫喚が響き渡りました。男達の振り翳かざす太刀をかわし、來桜丸は右へ左へと腕を振ります。その度に、確実に男たちの肉体は切り刻まれていくのです。それでも、來桜丸の身体には血の染み一つ残りはしませんでした。まるで、その美しい姿に触れるのを自ずから恥じるかのように。

血に染まつた配下の男たちが事切れた後、一人定まらぬ狙いで刀を構える頭目に來桜丸は尋ねました。

「お前達をここへ送り込んだのは誰じや？ 誰の命で、月姫様を狙うのか？」

頭目は訳のわからぬ叫び声を上げて、來桜丸に斬りかかって来ました。その刃を素手で掴み取ると、來桜丸は唇が触れ合つほど近くに顔を寄せ、頭目にこう囁きました。

「誰の命でここまでやつてきた？ 素直に白状すれば良し。さもなければ、生きたまま地獄を見る事になるやも知れぬが、それでも良いかえ？」

彼の鬼の右手は、頭目のわななく喉元にかけられています。

「お前の身体が死ぬる前に、心が死んでしまうやも知れぬなあ。わたしは容赦せぬぞ。じわじわと死ぬより辛い責め苦を味わわせてやろう。生きたまま五寸刻みに切り裂かれる気持ちは、如何様なものであろうなあ？」

静かに、來桜丸の爪が頭目の喉元に喰い込んでいきます。頭目の口からは、壊れた笛のような聞き苦しい声が漏れておりました。

「い……一條の……お方様じや。お方様に、砂姫を亡き者にせよと。お主上より正式に入内の申し入れがあり、砂姫を宮中へと。お、お方様は、妹姫様を入れさせるためには、どうしても砂姫を亡き者にする必要があると仰せになつた。されば、お主上もお心晴れて、妹の徳子様をお望みになると……」

「何じやと！？ たかがそれだけのために、姫の命を奪おうといふのか！ 義理とはいえ、母親なのであらう！？」

その時、來桜丸の背後で、枯れ枝を踏みしだく音がいたしました。咄嗟に振り向いた彼の視線の先には、無表情に佇む月姫の姿が……。

「月姫っ！ 何故！？」

一瞬、來桜丸の気が乱れる瞬間をついて、頭目はその手を振り解き逃げ出しました。思わず後を追おうとした來桜丸の背中に、月姫の制止の声が掛けられました。

「お待ち。良いのじや、追わずとも」

その静かな声に、來桜丸は足を止めました。そして、気付いたのです。『鬼』としての本性を、愛しい月姫に見られてしまった事を。言い訳のしようがありませんでした。なぜなら、彼の足元には、自

分が殺してしまった三人の男の物言わぬ骸が転がっているのですから。

「らいお……」

「何故！ 何故、お出でになつたのです！ あれほどお待ちくださいと申し上げたではありませんか！」

月姫の顔を見ることも無く、背を向けたままで來桜丸は叫びました。

「貴女に！ 貴女にだけは、この姿を見られたくはなかつたのです！ こんな浅ましい、醜い鬼の姿を！…」

血を吐くような來桜丸の叫びに、月姫はただ歩み寄り、彼の鬼の手をそつと取つたのでござります。

「このように、血を流して。鬼とそなたが呼ぶ者と、ここに倒れた者達にどれほどの違いがあると言つのじや。この者達はわたくしを亡き者にするために刃を抜いた。そなたは、わたくしを守るために闘つた。人と鬼との間に、どれほどの隔たりがあるつと言つのじや。わたくしを亡き者にしようとした義母上の心をこそ、鬼と呼ぶべきではないのか？ 共に流れる血は赤いというのに……人である義母上は、わたくしを疎んじた。鬼であるそなたは、わたくしを守つてくれた」

そして、刃を素手で掴んだために出来た傷に、そつと唇を当てたのです。その瞬間、來桜丸の身体には震えが走りました。姫をこのまま、自分のモノにしてしまいたいと言つ衝動が、身体の奥底から湧き上がってきたのです。しかし、たつた今、人を殺してしまった自分が、月姫を抱く資格があるのかどうか？ 何より、この清らかな姫を血に染まつた己が汚してしまつても良いのか。

自らの手を月姫の唇から離すと、來桜丸はやつとの思いで口を開きました。

「月姫様。これ以上わたしと共にいる事は、御身にとつて良い事ではないでしょ。どうぞこのまま屋敷へ帰り、警護の者たちに命じて守りを固めるのです。そうすれば、さしもの刺客達も、おさおさ

と屋敷へは忍び込めますまい」

「それで、そなたはいかが致すと申すのじゃ？」

「わたしは……わたしは山を降ります。このまま里へ帰つても、一族の者に迷惑をかけてしまうだけでしょうから」

そう言つて歩み去るゝとした來桜丸の背中に、鋭い月姫の言葉が投げつけられました。

「そなたも……そなたも、結局はわたくしを一人にするのじゃな？ わたくしを一人置いて、どこかへ行つてしまつというのじゃな？」

その震える声に、來桜丸は信じられない思い出振り返りました。

「皆、みんな、わたくしを一人置いて、どこかへ行つてしまふのじや。わたくしはいつも一人ぼっちじや。來桜丸、そなたも私の前からいなくなつてしまふと言つのなら、今この場で、わたくしの命を取つて行くがいい！」

月姫の頬を濡らす、幾筋もの涙 笑わぬ、泣かぬと言われていた月姫の、初めて流した涙でございました。

「月姫……泣いておられるのか？」

「泣く？ わたくしは泣いておるのか？ 判らぬ。そなたが、わたくしを置いてどこかへ行つてしまふと言つから。だから、わたくしの胸の奥が痛うて痛うて堪らぬのじや。これは何じや？ わたくしはどうにかなつてしまつたのか……」

來桜丸は月姫に歩み寄ると、その流れる涙を人差し指ですくい取り、そつと口に含みました。

「貴女は、わたくしを恐れぬのですか？ この身は、人が忌み嫌う鬼。たつた今、貴女の目の前で人を殺して見せた鬼なのですよ？」

「いかにそなたが鬼であろうとも、わたくしにとつて來桜丸は來桜丸。そなたに『月姫』と名を呼ばれれば、血の通わぬわたくしの心にも、何やら温かいものが溢れるのじや。そなたに名を呼ばれれば、わたくしの心は安らぐのじや。どこへも行くな。わたくしの側にいるのじや」

「姫……姫はわがままでござります」

月姫は來桜丸の胸に寄り添いました。その姫を、來桜丸は大事に大事に抱き締めたのでござります。お互いの気持ちを確かめ合つた、至福の時でございました。

しかし そんな二人を見つめる一対の眼があつた事に、ついに彼ら「は気付かなかつたのでござります。

「來桜丸が……鬼？ そんな

」

震える口元を押さえ、立ち尽くすのは……如月。

一度は村の入り口まで戻つた如月でしたが、やはりどうしても來桜丸のことが気になり、出かけていく二人の後をつけたのでした。しかし、如月の目に映つたのは、互いを大事そうに寄り添いう美しい二人の姿。

驚愕におびえていた瞳に、次第に涙が溢れて参りました。

「如月とて……如月とて、來桜丸が鬼でも蛇でも構いはせぬのに。なぜに、その姫なのじゃ？ どうして如月の方を見てはくれぬ？ 來桜丸に先に出会つておつたは、如月の方じや。なのに、なぜ如月を好いてはくれぬのじゃ！？」

激しい嫉妬が身のうちから湧き上がつて参ります。もはや、來桜

丸の心が自分の物にならぬと知つて、如月の心に闇が生じました。

「おのれ、許さぬ。來桜丸の心が得られぬならば、いつそ

」

その頃、月姫によつて結果的に命を助けられた刺客が、都に向つて早馬を飛ばしておりました。砂姫が「鬼」に取り憑かれている事を一条の大臣に知らせなくてはなりません。泡を吹き倒れる馬を乗り継ぎ、男は驚異的な速さで都に辿りつきました。

「か、開門！ 一条の大臣殿に、火急の御用にござります！」

屋敷内に倒れこんだ男を見て、小者達が騒ぎ立てました。一人の

者が屋敷内へと駆け込み、すぐにお目通りが叶う事となつたのです。「一条の大臣殿、ならびにお方様に申し上げます。吉野の山中にて療養中の月姫様が、妖しの鬼に誑たぶらかされておいでございます。私は姫様を鬼の手より救い出さんとしたのでございますが、相手は妖力甚大の鬼。手勢を失い、とにかく事の次第を皆様にお伝えしなくてはと、命を惜しんで帰つてまいりました」

さすがに『姫の殺害に失敗した』とは言えませぬ。馬上で考へていた口上を述べると、男はガクリと力尽きました。

それを聞いた奥方は、内心の喜びを隠して大臣に告げました。

「旦那様。これは由々『ゆゆ』しき事態でござります。一条の姫に鬼が憑いたなどと人に知られれば都中の笑い者。なんと恥知らずな姫でございましょう。このような事がお主上のお耳に入るような事にでもなれば一大事でござります。鬼に誑かされたとあつては、ものはやお主上の御前に出せる身体ではござりますまい。早々に討伐隊を募り、鬼もろとも姫を征伐してしまうのです。事が済んでから、お主上には奏上致せばよろしいのでござります。鬼に憑かれた不浄の娘を成敗いたしました、と」

実際に恐ろしきは、人の心でございます。奥方は自分の娘を帝に差し出すために、月姫を「鬼憑き」の娘として殺してしまえ、と大臣にせましたのです。逡巡する大臣に、奥方はこつ囁きました。『家名の恥』と。

帝の怒りを恐れた大臣は、とうとう奥方の言つ通り、討伐隊を募つて吉野へ向わせてしまつたのでござります。

來桜丸は月姫を屋敷へ戻すと、泰葉やすはにだけ、山中で起こつた事を伝えました。もちろん、自分が鬼であることは伏せましたが、刺客に襲われた事を正直に話し、屋敷の守りを固めるように頼んだのでございます。

そして一族の隠れ里へ戻り、真つ直ぐ百鬼丸の館へ向いました。

「お館様。よろしでしょうか？」

部屋の真ん中で考え方をしていた百鬼丸は、來桜丸の姿を見ると嚴つい顔を綻ほいひばせながら部屋の中へ招き入れました。

「どうした、そのように浮かぬ顔をして」

來桜丸は百鬼丸の正面に座ると、深々と頭を下げました。

「お館様。わたしは鬼の姿を人に見られてしまいました。なおかつ、そのまま逃げられてしまつたのでござります。このままでは、この里に鬼が住まうと知られています。こうなつてしまつたのはわたしの不始末。わたし一人に罪を被せて、どうぞ里の者たちは何も知らなかつた事に……」

百鬼丸は多くを問いませんでしたが、來桜丸は進んで全ての事を語りました。自分が一条の姫君に恋してしまつた事。姫の入内が決まり、慌てた義理の母親が姫を亡き者にせんと刺客を送り込んだ事。自分がそれを知り、怒りに任せて男達を殺してしまつた事。そして一人に逃げられてしまつた事。

來桜丸の告白を静かに聞いていた百鬼丸は、しばしの沈黙の後、來桜丸を見据えて口を開きました。

「して、月姫は何と申された？」

「月姫様は、『鬼と人との間に、どれほどの隔たりがあろうか』と。わたしがわたしである事が、姫にとつては大事なのだと……申されました」

それを聞いた百鬼丸は大きく息をつき、そつか、と呴きました。

「噂に違わぬ、清廉せいれんな方よ。來桜丸。我らは『鬼』と恐れられるが、

心がある。月姫様は『人』ではあるが、笑う事をお知りにならぬ。どちらが幸せなのだろうな？」

思わず問いかけに、來桜丸は百鬼丸の意図が読めず、答える事が出来ませなんだ。

「月姫様の申されるとおり、われら『鬼』と『人』との間にある隔たりなど、僅かなものだ。しかし、その僅かな隔たりが、果てしなく遠いのじや。それをあえて、ない、と申される姫の強さ。お主、余程、姫の心を捉えたと見える」

そのような事を言われても、來桜丸には返す言葉がありませぬ。「來桜丸。かような事を申してくれる女人は、この世に一人とはおるまいぞ。月姫様を大事にするのじや。お主が姫に、笑う事の楽しさを教えてやれば良い。生きていく事の苦しみや切なさや、それ以上の喜びや嬉しさを教えてやれば良いのじや。これは、お主にしか出来ぬ」

何と答えるべきなのか來桜丸が迷つているつむに、百鬼丸は立ち上がり大きく笑いました。

「里の事は心配せずとも良い。我らとて、おさおさ殺されたりはせぬよ。速やかにこの地より立ち去り、別の土地に根を下ろせばいいだけの事。元々我らは、漂泊の民。いかにこの地を追われようとも、住む土地に困る事もない」

そう言うと來桜丸の肩を軽く叩き、部屋を出ていたのでございました。來桜丸は、ただその後姿に頭を下げる事しか出来ませんでした。その日から、里の者たちは山を出るための支度を始めました。といつても、持つていく物はそれほど多くはありませんでしたが、身の回りの細々とした物、機を織るための道具、山を出るのに必要なだけの食料など。百鬼丸の手下は五十人ほどでしたが、その家族を含めれば大層な数となります。旅に邪魔になる大きな家財道具を除いたとしても、一晩や二晩で準備できる量ではありませんでした。

そしてそれが、決定的な結末を招いたのでございます。

里を捨てる支度をしている者達は、詳しい理由を聞いてはいませんでしたが、なんとなく気配で察していたのでしょ。來桜丸と月姫の事が原因だという事を、暗黙の了解として知っていました。しかし、一人として來桜丸の失態を責める者はいなかつたので「さいます。それよりむしろ、そこまで心を通わす事の出来た相手と巡りあえた幸せを^{じよほ}寿ぎました。來桜丸もあえて多くを語らず、皆の温情に黙つて頭を下げておりました。

荷造りもそろそろ終わり、明日には里を引き払う、という晩。百鬼丸の館に如月が訪ねて参りました。これまで、里にやつてくるのが昼の限られていた如月が、なぜ?といぶかしみ、來桜丸は如月に呼び出された里の入り口までやつて来ました。

「このよつな夜更けに、一体どうしたのじや?」

「來桜丸。お主、如月に隠してある事があるじやろ?」

「何を言ひ出すのじや? 今はもう遅い。早く村へ帰るが良い」來桜丸が如月を送つて行つとしたその瞬間。如月は思いがけない言葉を口に致しました。

「如月は知つておる。お主が鬼じやと言つ事を。先日、川縁で男達を殺したであろう? 如月は見ていたのじや」

その言葉に來桜丸は凍りつきました。見られた? 鬼である姿を?

「如月は誰にも言わぬ。だから、ここに残つて、一緒に暮らそう? 來桜丸、如月と一緒にここで暮らひや。お主が鬼でも構わぬ。お主の事が好きなのじや!」

如月が來桜丸の着物にしがみついてきます。その肩に手をかけ、ぎこちない仕草で來桜丸は問いかけました。

「見て……いたのか?」

娘は「べつとうなずくと、來桜丸の胸に愛しそうに頬を寄せました。

「砂姫の所へなど行くな。如月と共に暮らすのじや。そうしてくれれば、誰にも言わぬ」

「つゝとつと眼を閉じる如月へ、來桜丸は語りかけ始めました。

「月姫と出会わなければ、あるいは、お前の気持ちを受け止める事が出来たやも知れぬ。しかし、わたしは月姫と出会つてしまつた。唯一無二」この人だけだと思えるお方に出会つてしまつたのじや。済まぬ。如月の気持ちは嬉しいが、わたしにはその気持ちに応える事が出来ぬ……」

如月はその言葉を聞くと、來桜丸の胸に添えた両手を握り締め、彼の鬼の身体を突き飛ばしました。

「おのれ……。あくまでも、あの薄気味悪い姫を取ると誓つのじやな？ ならば、はよう行ぐが良い。都から来た武士どもが、一條のお屋敷を取り巻いておるわ。鬼に取り憑かれた姫を、成敗するのじやと/or>うてな！」

「何じやと……？」

「はよう行かねば、愛しい姫様が殺されてしまつぞえ？ はは！
ほほほ！ 速く駆けて行くが良い！ 間に合えば良いの……」

毒に満ちた言葉でございました。この時の如月の形相こそ、まるで鬼のようでござります。そう。來桜丸愛しさに、如月は嫉妬の鬼となつてしまつたのです。

來桜丸は慌てて館から馬を牽き出すと、月姫の屋敷めがけて夜道を駆け出しました。その背中には、突き刺さるような如月の笑い声……。しかし、來桜丸には如月の事を案じていい暇などございませんでした。間もなく見えてきた月姫の屋敷は、赤々と松明で照らし出され、恐ろしい悲鳴が闇を切り裂いているのでござります。

「月姫っ！！」

來桜丸は屋敷を取り囲む武士達の中へ踊り込み、その爪で幾人の喉笛を切り裂き、胸板を貫き、刀を奪つて荒れ狂いました。その凄まじい姿に周囲がひるんだ隙に、屋敷内へ入り込む事が出来ました。

「姫！　月姫！　月姫様は、いざこにおられる！？」

馬を飛び降り、階を駆け上がり、來桜丸はただひたすらに、愛しい姫の姿を捜し求めました。ここにきて、屋敷に勤めていた者達の変わり果てた姿に出くわしました。何の罪もないはずの者達が、まるで虫けらのように殺されているのです。

「貴様！　何奴じゃ！？」

背後から吹き付けようつた殺氣と怒号が響いてまいります。

「貴様が鬼じやな？　そこへ直れ、この俺が成敗してくれるわ！！」

「やかましい！　邪魔じや、どけ！」

振り翳した刀を腕かわ」と叩き斬られ、聞き苦しく泣き喫いている男を捨て置き、來桜丸は部屋から部屋へと月姫を捜し求めました。

「月姫！　どこにおられるのです！？」

「來桜丸…？」

來桜丸の呼び掛けに、脇にある小部屋から声が致しました。気付いた來桜丸が引き戸を蹴破ると、そこには泰葉を抱いた月姫がおられました。

「月姫！　よくぞ、」無事で」

「わたくしの代りに、泰葉が傷を」

よく見れば、泰葉の身体は背後から袈裟懸けに斬られておりました。泰葉を支える月姫の両手も血で染まっております。

「ここにちは危のうござります。ひとまずは、わたしどもの里へお出でください」

そう言って、泰葉に手を貸そつとした來桜丸を、女房の冷たい手が止めました。

「來桜丸殿……。わたくしの事は捨て置きくださいませ。もうそれほど、長くは生きられませぬ。わたくしを連れて逃げれば、足手まといになるだけ。それよりも、どうか姫様を。月姫様を、どうぞよろしくお頼み申し上げます……貴方なら、きっと姫様に笑う事を伝える事が出来るはず……」

そして自分を支える月姫の手を、そつと來桜丸の手に握らせまし

た。

「姫様、どうぞ」無事で……。來桜丸殿と、きつと幸せになつてくださいませ」

それが泰葉の最後の言葉となりました。静かに微笑みながら、老女は息を引き取つたのでござります。

「泰葉？ 泰葉！？」

月姫の声に胸を引き裂かれそうになりながらも、來桜丸は月姫を守るために立ち上りました。ここでぐずぐずしている訳にはまいりません。どうやら、外にいる者達が、屋敷に火を放つたようでございました。きな臭い匂いが漂つてまいります。

「どうか、姫。ここで死んでしまわれては、泰葉殿の死は無駄になつてしまします。わたしが命に代えてもお守り致します。早く！」あちこちで上がる火の手をかいぐぐり、一人は屋敷の外を目指しました。回廊を回り、屋敷の裏手に出ると、そのまま山中へ逃げ込もうとしたのでござります。廊下を飛び降り、月姫の手を取つて走る來桜丸の前に。

「どこへ行こうといつのじや？」

「……如月」

ゆらりと、どこからともなく、如月が現れたのでござります。

「どいてくれ、如月」

「鬼の隠れ里へでも逃げ込むうと叫うのかえ？ それは無駄と言つものじや」

冷酷な微笑みをたたえた如月の言葉には、どうまでも毒が染み付いております。

「どういう意味じや？」

「ほほほほ！ お主の里など、もうすでにないわ！ 都から来た討伐隊が、鬼どもを平らげてしまつたのでな！ 男衆も女衆も皆殺しじや。鬼と言えども、寝込みを襲われてしまえば、他愛のないものじや。満足に反撃も出来ぬまま、そろつて地獄へ帰つて行つたわ！ 百鬼丸の首は、里の入り口に晒されておつたぞ」

一族の隠れ里までの道は巧みに隠されており、慣れた者でなくして見つけることが出来ぬはず。なぜ、都の者どもに判つたと言ひつか?

「不思議そつな顔じやな? 教えてやろう。わたしが教えたのじや。山深くに住む、鬼の一族の隠れ里を、わたしが教えたのじや!!」
言葉を失くしてしまった來桜丸の陰から、月姫が姿を現し、如月と対峙しました。

「そなた、なぜ隠れ里を教えたのじや? そなたが欲しかつたのは、來桜丸ではないのか? ならば、里の者達は関係なかう!」

月姫を目にした如月は、瞳を吊り上げて申しました。

「煩い! 元はと言えば、お前が悪いのじや! お前さえ出てこなければ、來桜丸は如月のものになつたのに! 來桜丸が手に入らないのなら、誰の手にも渡さぬ。お前にだけは、渡しはせぬぞ! どこへも行かせぬ! 來桜丸はここで死ぬのじや。そして、わたしは來桜丸の骨を抱いて暮らすのじや。だから、邪魔な鬼どもを始末したのじや!!!」

「そして、そなたも鬼になつたのじやな?」

「そうじや! 來桜丸が恋しくて恋しくて、わたしは嫉妬の鬼になつたのじや!」

「如月、とか申したか。わたくしはそなたが羨ましい。それほどまでに誰かを恋焦がれ、我が身を鬼にまで成そうとは……。だが、わたくしもそなたに來桜丸を渡す事は出来ぬ。もはやわたくしも、來桜丸のおらぬ暮らしは考えられぬ。わたくしにとつて、來桜丸は命にも等しい、大事な者なのじや」

月姫の告白に、來桜丸はその毅然とした姿を見つめて立ち尽くしておりました。しかしその時、屋敷を取り囲んでいた武士達が、裏手にいる三人を見つけてしまったのでござります。

「おつたぞ! あそこじや!」

「逃がすでない!!!」

瞬間、月姫の気持ちがそちらへと逸れました。それを知つた如月

は、狙いを定めて月姫へ飛び掛りました。

「お前だけには、來桜丸を渡すものか！！」

「ドウツ！」

如月の揃えた五指の爪は、狙い違わず心の臓を貫いておりました。

「あ、どうして？」

食いしばった口元からは、糸の様に血が滴つてあります。如月の腕を掴み、その爪に胸を貫かれているのは……。

「「來桜丸っ！！」」

二人の女の悲鳴が重なりました。如月が月姫に襲い掛けた瞬間、來桜丸は月姫をかばい二人の間に身を投げ出したのです。

「なぜ？なぜじゃ！？」

「如月……お前には、詫びても足りぬ。だが、わたしは月姫を選んでしまった。月姫の他に、誰もわたしの心を動かせるものは……いないのじゃ」

震える如月が、來桜丸の胸から指を抜き出すと、支えを失った來桜丸の身体は地面へ倒れこみました。

「來桜丸！來桜丸う！！」

その身体を抱き起こし、月姫が來桜丸の名を叫びました。驚きと恐怖に彩られた瞳。そんな月姫の瞳を、翳かすんでいく視界に必死に焼き付けながら、來桜丸は微笑んで見せました。

「ご無事で？」

「なぜ、わたくしをかばった!? そなたがいなくなってしまったら、わたくしはどうすれば良いのじゃ？ 泰葉が申したであろう？ わたくしに笑う事を教えてくれるのではなかつたのか？ 来桜丸！」

「月姫様 貴方様は、わたしの命。でも、わたくしと共におられる

と、貴方は泣いてばかりおられる。わたしは貴方に、生きる事の楽しさを教えて差し上げたかつた……。わたしに、人を愛する心がある事を教えてくださった貴方に、嬉しさや喜びを教えて差し上げたかつた……」

「死んでは駄目じゃ！ 教えておくれ！ 笑う事も、苦しむ事も、楽しむ事も、怒る事も、そなたが教えてくれなくては、わたくしには判らぬのじや…… そなたでなくては、駄目なのじや……」

來桜丸の顔に、大粒の涙がぱたぱたと落ちては広がっていきます。來桜丸は力を振り絞り、腕を伸ばして月姫の頬に触れました。そして流れる涙を拭うと、花の様に美しく笑んで見せたのでござります。「姫は、わがままじや。……わたしの名は、來桜丸。桜の花咲く頃、必ず、貴女をお迎えに参ります。どうかその時にわたしが道に迷わぬよう、桜が咲いたら、琵琶を奏でてくださいませ……。その音に導かれて……必ず、貴女を迎えて参ります」

それが最期の言葉となりました。月姫の頬に触れていた來桜丸の手が、力なく地面に落ちました。

「いや……いやじや！　來桜丸！　逝つては駄目じゃ！　目を開けておくれ！！！」

來桜丸の身体にすがりついた月姫の手の中で　。

ザウツ　！

一陣の風と共に、來桜丸の身体は無数の桜の花びらとなつて舞い散つたのでござります。後に残されたのは、月姫の腕の中にある、來桜丸の衣だけ……。

「逝つて……逝つてしまつた……。わたくしの愛した美しい鬼は、わたくしを置いて、逝つてしまつた……」

「その後、月姫と如月はどうなつてしまわれたのですかな？」

私の問いに、老婆は咲き誇る桜の花へと視線を移し、

「月姫は、討伐隊と共に都へ移され、鬼払いの祈祷を散々受けさせられたのでござります。しかし、ある日忽然と屋敷から姿をくらまし、そのまま帰らなかつたと申します。一方の如月は、己の所業を恥じ、鬼の身でありながら髪を落とし出家して、自分が手にかけてしまつた來桜丸とその一族の菩提を弔いながらその後の生を終えたと聞き及んでござります」

「……月姫は、來桜丸と再び巡り会う事が叶つたのでございましょうか？」

「さて……それはいかがでございましょう？」

老婆は再び琵琶を抱え直すと、不思議と景色を映してはいよいよに思える瞳で私を捉えた。

「年寄りの繰言に付き合つてくださいり、かたじけのつございました。ここより先は、來桜丸、そして百鬼丸の一族が眠る土地。出来れば、このまま静かに眠らせてやりとづござります……」

「あい分かつた。私は鬼の土地へは踏み込みます、この場を去るといったそう」

静かに首を垂れる老婆を残し、私は桜舞い散る山道を、元来た方へと歩み始めた。

不思議な話を聞いたものだ。悲しく、切なく、そして美しい物語であった。それはそうと、あの老婆は一体何者であったのか？

私がそう考えた時、一陣の強い風が、桜の花びらを舞い上げた。そして…。

『 月姫。長き時を、お待たせ致しました』

『來桜丸か？ 待つておつた。いつか、きっと出会えると信じて…』

私の耳には、確かに聞こえたのである。聞いた事はないが、あれは確かに美しく優しい鬼・來桜丸と、笑う事を知らず愛する者を失つた美貌の姫・月姫の声に間違いない。

慌てて踵を返し、先程、老婆が座っていた場所まで取つて返した。しかしそこには、老婆が抱えていた琵琶が、ぽつねんと置かれているだけである。辺りを見回した私の目に、咲き誇る桜の木々の間から見え隠れする男女の姿が映つた。優しげに微笑む若者は、きっと來桜丸なのだろう。その腕に抱かれて、幸せそうに笑っているのは、きっと月姫なのだろう。

「貴女は、ずっと待つていたのだな。桜の花の咲き誇る季節、約定を交わした愛しい鬼が、自分を迎えてくれる事を信じて」

寄り添う二人は、静かに花霞の中へ消えて行つた。
笑う事を知らなかつた薄倖の姫は、愛しい鬼と再び^{まみ}見える事で、ようやく幸せに笑う事を知つたのである。

私はその場に残された琵琶に、そっと手を合わせた。

（完）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4605v/>

桜舞恋歌

2011年8月4日23時27分発行